

ウズベキスタンにおける市場経済化と絨毯

——その制作現場と利用方法に着目して——

平成 17 年度入学

派遣国：ウズベキスタン共和国

宗野ふもと

キーワード：ウズベキスタン，絨毯，市場経済化

対象とする問題の概要

1991 年のソ連解体は、ウズベキスタンの社会状況を大きく変化させた。村落部では国営農場が閉鎖され、多くの人々が職を失った。また、物価も日々上昇する中で、人々にとって現金獲得の重要性は大きくなってきているといえる。こうした社会状況を背景に、手織り絨毯の制作と利用がどのように行われているのか、ソ連時代と比較してどのように変化したのかを明らかにすることが本研究の目的である。

ウズベキスタンでは、現在でも牧畜が盛んに行われている地域を中心に、手織りの絨毯が制作されている。地域で採れる羊の毛を利用して織られる絨毯は、部屋に敷かれたり、壁掛けとして用いられたりするほか、結婚式における花嫁の持参財としても不可欠なものである。持参財として織られた絨毯は、結婚式と結婚後しばらくの間は、サンディクと言われる長持の上に同じく持参財として用意された布団や枕とともにきれいに積みあげられ、花嫁見物に来た客の目に触れることとなる。このように、花嫁とその家族の価値を示す絨毯も、その後必要になれば売られることもある。近年、地域の定期市で売られる絨毯は増えているといわれている。



制作中の絨毯

研究目的

中央アジア地域研究は、近年ようやくその成果が蓄積されつつらの生活を市場経済化に適合させているか、適合させられないのはブハラ州で持参財として位置づけられてきた刺繍布が、市場に伴い販売を専門にする刺繍屋と縫い子の出現を記述した。この市場経済化が刺繍布というひとつのものを変化させたことは明らかである。ローカルな価値がどのように並存し、影響を及ぼし合い変化していない。本研究では、先行研究の問題点をふまえ、市場経済化によって見えてこない絨毯の市場価値とローカルな価値の並存と拮抗そして変容を、制作現場と利用方法に着目し考察する。

フィールドで得られた知見

年代別に持参財の内容について聞き取りをしたところ、持参財として用意される物は年々増加していることが明らかになった。絨毯もしかりで、1970 年代に結婚した女性が持たされた絨毯は一枚だけであったのに対し、2010 年に結婚した女性には 4 枚の絨毯が用意されていた。絨毯の枚数が増えている

理由として、家が大きくなっており部屋に敷くための絨毯がより多く必要になっていること、人々の生活が豊かになっていることが挙げられていた。すでに述べたように、絨毯は結婚式、結婚後には新郎新婦の部屋に飾られ、見物にやって来る多くの女性の目に触れることとなる。そして、新婦の持参財の内容は、村の女性の話のネタとなるのである。こうしたことから、調査地において絨毯は花嫁の実家の財力を表す威信財として位置づけられているといえる。

売り物としてではなく、あくまでも花嫁の持参財として制作される絨毯であるが、現金が必要になった際には売られることもある。そこで、どのような理由で絨毯を売っているのか、定期市で絨毯を売る人から、売る理由についてインタビューをした。絨毯を売る理由としては、子供の学校用品や衣類、薬の購入などにあてられており、日常生活におけるそれほど大きくはないが突発的な出費に際して絨毯が売りに出されることが多いことが明らかとなった。ソ連時代は、羊毛の価格が統制されていたため、絨毯の価値は現在よりも高く、当時は一枚の絨毯で一頭の乳牛が手に入った。現在では、乳牛一頭を手にするために絨毯を10枚は売らなければいけないという。絨毯を売る理由について尋ねて回っていた時、多くの売り手が、その理由をためらいながら語ったり、時には理由を語ってくれないこともあったのは、絨毯を売ることは、家計の主な収入が少ないことを表すという行為であり、経済的に余裕のない人がすると認識されていることが原因としてあるのだろう。

以上のことから、絨毯は、人々の家計を助けるものでありながらも、威信財としても位置付けられていることが明らかになった。さらに、絨毯を売ることは、人々にとってためらいを伴いながら行われる行為であることも浮かび上がってきた。これは、あくまでも持参財として制作されることが背景にあると考えられる。そこには、市場経済化を背景にして、日常生活における現金の重要性と絨毯の社会的な価値の拮抗が生じていると言えるだろう。

今後の展開、反省

今回の調査では、絨毯の仲買人の行商に同行をしようと考えていたが、懇意にしている仲買人と日程の折り合いがつかず断念した。そのため、行商先で手織りの絨毯の需要がどれほどあるのかについては不明のままである。今後の調査では実現させたい。また、今後は絨毯以外の物の運用方法、例えば家畜や儀礼におけるもののやりとりについても明らかにし、ものが調査地の人々の生活や社会関係の構築にどのように作用しているのか、そしてその中における絨毯の特性とはなにかについても考察をしていきたいと考えている。

引用文献

今堀恵美. 2008. 「持参財を飾る刺繍、販売する刺繍：ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区のカシュタ制作を事例に」高倉浩樹、佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』（国立民族学博物館調査報告）78：451 - 480.



積みあげられた持参財



絨毯市